

## Revision of Blended Learning in Japan

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2018-07-20<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 藤本, かおる<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://mu.repo.nii.ac.jp/records/893">https://mu.repo.nii.ac.jp/records/893</a>           |

[レビュー論文]

# 定義からみる日本における ブレンディッドラーニングの概要

Revision of Blended Learning in Japan

藤 本 かおる

キーワード：ブレンディッドラーニング、eラーニング、日本語教育、教育工学

## 1. はじめに

日本国内で文献に「ブレンディッドラーニング」あるいは「ブレンディッド・ラーニング」<sup>1)</sup>が見られたのは、2003年ごろからである（林・林田2003）。その後、2006年にJosh Bersin “The BLENDED LEARNING BOOK” が『ブレンディッドラーニングの戦略』として和訳出版され、eラーニングのドロップアウト問題などを解消する手立てとして注目された。Bersin (2006)では、主に企業研修の事例が多く取り上げられていたが、この手法は学校教育にも取り入れられ、日本語教育でも事例が見られるようになった（西郡他2007、篠崎2007）。その後、2017年に新たにMichael B.HornとHeather Stakerの『ブレンディッド・ラーニングの衝撃』が出版された。

BersinとHorn・Stakerには約10年の隔りがあり、ICT<sup>2)</sup>技術及び教育は様々な変遷を経ている。この間、日本国内の実践研究では、ブレンディッドラーニングをどのように定義し研究してきたのだろうか。反転授業など新たなICTを利用した教育も注目を集めている現在、ブレンディッドラーニングの実践研究を、日本国内の研究の多くが参考にしていると思われるBersin (2006)と、最も新しく大規模なブレンディッドラーニングの研究であるHorn・Staker (2017)、そして、国内におけるICT利用教育関連の一般書、日本語教育や外国語教育の論文にの3つわけ定義を分類し、そこからこれまでの日本におけるブレンディッドラーニングの実践研究について外観する。

## 2. BersinとHorn・Stakerによるブレンディッドラーニングの定義

### 2.1. Bersin (2006) によるブレンディッドラーニング

Bersin (2006)では、ブレンディッドラーニングを、「特定の顧客に対して最適のトレーニングプログラムを作り出すために、異なるトレーニングの『メディア』（技術、活動、事象の種類）を組み合わせることである。『ブレンディッド』という用語は、伝統的なインストラクター主導

のトレーニングが電子的な方式で補完されることを意味している。本書の文脈において、ブレンディッドラーニング・プログラムは多くの異なる形態のeラーニングを用い、インストラクター主導のトレーニングとそのほかのライブ形態によって補完されることもある。」(Bersin 2006, p3下線筆者)としている。また、ブレンディッドラーニングを5つのモデルに分け(表1)、それぞれの実践例を紹介した。

表1 5つのブレンディッドラーニングモデル

| モデル   | 特徴   |
|---|--|
| 1. eラーニングにより自己学習<br>プラス、ほかのブレンドされ<br>たメディアまたはイベント | 自己学習コースが中心のプログラム。集合研修は提供されない。学習者はオンラインのコアエンドスポークコースを取り込む複数のメディアを利用する。                                      |
| 2. インストラクター主導プロ<br>グラムと自己学習eラーニング<br>のブレンド        | プログラムはインストラクター主導のイベントと自己学習のeラーニングのブレンドである。eラーニングのアクティビティは事前学習、授業中、授業間の学習に利用される。これは、教室の学習をより効果的にする優れた方法である。 |
| 3. ライブeラーニングへの多<br>メディアの追加                        | ライブeラーニングイベントまたはオンラインセミナーがトレーニングの基礎を形成する。自己学習、練習、参考文献は周囲のアクティビティとして提供される。                                  |
| 4. OJT中心  | 主要な要素は管理者またはインストラクターによるOJTである。技術が複雑で、「示されなければならない」プログラムにおいて主に使用されている。                                      |
| 5. シミュレーションと学習セン<br>ター                            | シミュレーションまたは学習センターが利用されている。通常、ITとアプリケーションプログラムに利用され、全体の環境をシミュレーションすることができる場所で訓練される。                         |

Bersin (2006) では、それぞれのメディアの特性を生かし、どのように組み合わせるかという点が重要とされており、定義にあるようにインストラクター(教師)による対面授業は、必要に応じて組み合わせられるメディアの1つになっている。

## 2.2. Horn・Staker (2017) によるブレンディッドラーニング

Horn・Staker (2017) は、150件を超えるブレンディッドラーニングの実践者へのインタビューから、「ちょうど良い(原文まま)」中庸の定義を確立し、ブレンディッドラーニングには、3つの要素があるとしている。1つは、少なくとも一部がオンライン学習からなり、生徒自身が学習の時間、場所、方法またはペースを管理する正式な教育プログラムであること、次に、少なくとも一部は自宅以外の監督者のいる教室で学習する、そして、各生徒の一つのコースにおける学習内容は、カリキュラム全体の一部として機能するように統合されていることである(Horn・Staker 2017)。そして、ブレンディッドラーニングを以下のモデルに分類した(Horn・Staker 2017, p36)。

### 1. ローテーション・モデル

一つのコースまたは科目の授業において、一定時間ごと、あるいは教師の指示により、生徒が異なる学習形態をローテーションで移動して回る。学習形態のうち少なくとも一つはオンライン学習。下位分類に「ステーション・ローテーション」、「ラボ・ローテーション」、「反転授業」、「個別ローテーション」がある。

### 2. フレックス・モデル

一つのコースまたは科目の授業において、時に校外学習を実施することがあっても、オンライン学習が中心。生徒は、個別にカスタマイズされ柔軟な時間割に従って学習形態を移動する。教師は学校内にいて、学習拠点は主に学校。

### 3. アラカルト・モデル

学習活動は学校または宅習センターで実施されるが、特定のコースの授業は全てオンラインで完結し、教師はネット上に存在する。オンライン学習は、学校内外で受けることが可能。

### 4. 通信制教育

一つのコースまたは科目の授業において、生徒はあらかじめ決められた担当教師との対面授業に出席すれば、残りは対面授業に参加せずにコースを完了することができる。生徒が遠距離の場合、オンライン学習が学びの中心になる。

また、ブレンディッドラーニングをハイブリッド・モデルと破壊型のブレンディッドラーニングという2つのタイプとして考え、ハイブリッド・モデルは従来の教室を維持し、破壊型は全く別なものに置き換えるとしている。破壊的イノベーションとは、経済的あるいは技術的な理由で市場に参加できない底辺にいる人々のために、最初はシンプルな製品やサービスを提供することであり、ハイブリッド・モデルとは、従来の方法に新しい破壊的イノベーションを一部取り入れる方法である（Horn・Staker 2017）。破壊型として現在考えられるのは、オンライン学習が中心のフレックス、アラカルト、通信制教育であるが、これらの破壊的モデルも「学校」全体を破壊するのではなく、現在ではまだ従来の「教室」を破壊するにとどまっているとしている（Horn・Staker 2017）。

## 2.3. まとめ

Horn・Stakerのブレンディッドラーニングの定義を見ると、Bersinの定義とは、2つ目の要素「少なくとも一部は自宅以外の監督者のいる教室で学習すること」に相違が見られる。つまり、Horn・Stakerのブレンディッドラーニングの定義では、実際に1つの場所に集まる対面授業が組み込まれていることが絶対条件としてあげられているが、Bersinの定義では、そのような対面授業は有効な手段とされているものの、リアルであれオンラインであれ、授業デザインの中で絶対条件としては挙げられておらず（表1）、それぞれの目的に合わせたメディアの選択と組み合わせの重要性を挙げている（Bersin 2006）。以上から考えるに、Horn・Staker（2017）は、破壊的イノベーションという新しい概念を提示したものの、対面授業を必須としたこと、また、正式な教育プログラムであることを限定したことにより、一見するとブレンディッドラーニングの広がりを狭めてしまったように思われる。

### 3. 日本国内でのブレンディッドラーニング研究

#### 3.1. 考察の視点

次に、日本国内でのブレンディッドラーニング研究に関する一般書や論文を見ていくが、その際、ブレンディッドラーニングにおいて、「対面授業が絶対条件か」、「対面授業の形態」、「教育現場に関する制約があるか」という点に注目する。これは、BersinとHorn・Stakerのブレンディッドラーニングの定義において、違いが見られた点である。

#### 3.2. ICT利用教育関連の一般書ブレンディッドラーニングの定義

ブレンディッドラーニングに関して国内で出版されたものとしては、鄭・鈴木・久保田（2008）、宮地功編著（2009）がある。しかしながら、eラーニング関連の書物には、ブレンディッドラーニングに章を割いている書籍があるので、それらの書籍の中でのブレンディッドラーニングの定義もまとめる。

国内で書かれた書籍では、Bersinの『ブレンディッドラーニングの戦略』を参考にし、メディアの種類を参照しているため、定義も似通っている。その中で、宮地編（2009, p94）は、「狭義としては『eラーニング（e-learning, computer-mediated learning）と対面授業（face-to face learning）の融合』（森田2004）や『オンライン学習（online learning）と伝統的学習（traditional method of learning）の融合』（Thorne 2003）、『集合学習（classroom traing, campus-based lerning）と個別学習（distributed learning）の融合』（Back and Graham 2006）などの言葉で表現されるものである。」として、オンラインでの学習と対面授業を組み合わせた様々な形態を想定している。

玉木（2010, p16）では、集合研修、eラーニングにはそれぞれの良さがあり、「両者を目的に応じて組み合わせることで、より効果・効率のよい学びを提供していこうというのが、ブレンディッドラーニング」としている。2000年はeラーニング元年と言われており、2010年前後は一般的にeラーニングが用語としても教育および研修の1つとして定着した頃だと思われる。その間に出版された書籍では、ブレンディッドラーニングは主にeラーニングの文脈で捉えられていると言えよう。

#### 3.3. 日本語教育におけるブレンディッドラーニングの定義

日本語教育でも2007年頃からブレンディッドラーニングの実践研究が行われてきた。最初に見られるのは西郡他（2007）で、Bersinの定義をそのまま使用している。篠崎も2009年から継続的にブレンディッドラーニングでの授業を行っており（2009、2010、2011a、2011b、2013a、2013b）、初出の2009年の論文では「BL<sup>3)</sup>とは、eラーニングを使ったオンライン教育と従来の対面式授業におけるオフライン教育を融合した授業モデルで、双方のデメリットを最小限に抑えつつ、同時に両者のメリットを最大限に活かせる授業モデルとして注目されている」とある。篠崎は一連の研究において、Bersin（2006）を参考文献にしている。上記を含め日本語教育でのブレンディッドラーニングを採り上げた論文における定義を表2にまとめた。論文中で明確な定義がない場合は、定義欄を空白にした。また、表記が定まっていないことから、それぞれの呼称

も明記した。

表2 日本語教育でのブレンディッドラーニングの定義

|    | 年    | 筆者    | 呼称            | 定義   |
|----|------|-------|---------------|--|
| 1  | 2007 | 西郡他   | ブレンド型         | ブレンド型の学習（Blended Learning）とは学習者に合わせ異なるトレーニングのメディア（技術・活動・事象）を組み合わせることと言う（Bersin, 2006）。   |
| 2  | 2008 | 藤本    | ブレンディッド・ラーニング |  |
| 3  | 2008 | 篠崎    | ブレンディッドラーニング  | BLとは、従来行われてきた対面式授業（オフライン教育）にeラーニング（オンライン教育）を融合した授業モデルである。オンライン教育とオフライン教育双方のメリットを活かしつつ、教育効果を高め、また学習意欲に寄与する授業モデルとして、注目されている。   |
| 4  | 2010 | 中溝    | ブレンディッド・ラーニング |  |
| 5  | 2010 | 池田    | ブレンディッドラーニング  | しかし、ブレンディッドラーニングについての研究が進むにつれ、その定義が変わってきており、現在では、「伝統的な教室での対面授業とeラーニングを融合させた学習」と定義されることが多くなってきている（Miller et al.2004、Ginns and Elles 2007）。この定義におけるeラーニングとは、非同期分散型の自学自習コンテンツによる学習、オンラインで提供される小テストの受験などの情報技術を活用したバーチャル空間における学習を指している（安達、2007） |
| 6  | 2011 | 安藤    | ブレンディッドラーニング  | ブレンディッドラーニングは、一般的に、伝統的な教室授業にeラーニングを補完的に組み合わせた学習であると定義される（Bersin 2004）。   |
| 7  | 2011 | 藤本    |               |  |
| 8  | 2012 | 池田・深田 | ブレンディッドラーニング  |  |
| 9  | 2013 | 望月    | ブレンディッド・ラーニング |  |
| 10 | 2014 | 竹村    | ブレンディッドラーニング  | Hearvey（2003）によれば、ブレンディッドラーニング（以下、BL）とは、相互に補足しあい、学習を促進するようデザインされた複数の媒体を複合させたもので、具体的には伝統的な対面型授業やライブe-Learningなどのイベント主体の活動と、自己管理による自主学習とを組み合わせたと述べている。   |
| 11 | 2014 | 古川・池田 | ブレンディッド・ラーニング | 「ブレンディッド」とは「混合する、混ぜる」という意味であり、BLとは従来の教室等で行う対面学習（オフライン学習）とeラーニング（オンライン学習）を融合した学習を意味します。   |
| 12 | 2016 | 原田    | ブレンディッド型      |  |

|    |      |                  |                  |   |
|----|------|------------------|------------------|---|
| 13 | 2017 | 伊藤・<br>伊藤・<br>木塚 | ブレンディッド<br>ラーニング | 原島（2009）によると、ブレンディッドラーニングの根本的な定義は、「学習形態をブレンドすること」である。これには狭義と広義があり、狭義にも様々な概念があるが、本研究では「オンライン学習（online learning）と伝統的学習（traditional method learning）の融合」（Thorne2003）という概念を用いる。 |
|----|------|------------------|------------------|---|

2011年頃までの研究のほとんどが、Bersin（2006）を参考にしているが、その後、定義は明確でなくなり、2014年以降は、参考文献にBershin以外のものもみられる（竹村2014, 古川・池田2014, 伊藤他2017）。また、論文の中でブレンディッドラーニングを定義づけていないものもあるが、定義付けられている論文から見ると、日本語教育におけるブレンディッドラーニングは、これまでの伝統的な対面授業とオンライン授業の組み合わせであり、教室授業のバリエーションの1つとして取り入れられていることがうかがえた。

### 3.4. 外国語教育におけるブレンディッドラーニングの定義

次に、日本語以外の外国語教育分野で発表された論文の中でブレンディッドラーニングの定義であるが、趙・今野他（2012, p50）では、定義ではなく「外国語学習においてeラーニングと対面授業の組み合わせによるブレンディッド・ラーニングを適応することで、双方の利点を生かした効果的な学習が期待できる。」と説明されている。趙が富田他と発表した論文（2013a, p75）でも同様に「通常の対面授業と授業後のeラーニングを相補的に連携させた」としている。ALLUM（2013）も英語の先行研究を参考に自身の研究におけるブレンディッドラーニングを詳細に説明している。また、榎田（2013）においてはGraham（2005）の定義のうちの「(3) Combining online and face-to-face instruction.」を用いており、Garrison & Vaughan（2008）やTselios, et al.（2011）の定義（中津川・平田2017）など、英語教育においては、Bersin（2006）以後発表されたものを参考にしていることが多いようである。外国語教育では英語論文を先行研究として参考にしているものが多いが、定義自体には日本語教育と違いは見られず、内容も日本語教育と同様、伝統的な対面授業とオンライン学習を組み合わせるといったものがほとんどであった。しかし、中津川・平田（2017）、ドン（2017）では、ブレンディッドラーニングの定義が揺れていることが示唆されており、様々な実践研究が進むにつれ、ブレンディッドラーニングも変化しつつあることがうかがえる。

### 3.5. その他

分野別にブレンディッドラーニングの定義をまとめたが、先行研究にはブレンディッドラーニングの定義がない論文が一定数あった。これは、日本語教育外国語教育問わず、ブレンディッドラーニングに関しての論文が発表され始めた頃から現在まで同様である。今回、教育学分野と医療分野についても調べたが、その利点を挙げているものはあっても、ブレンディッドラーニングの定義が明記されていないものが多かった。

### 3.6. まとめ

国内の外国語教育を中心にブレンディッドラーニングの定義を考察したが、その結果から、これまでの日本におけるブレンディッドラーニングは、伝統的な対面授業とICT技術を使ったオンライン学習を組み合わせるものと捉えている研究がほとんどであることがわかった。Bersin (2006) では、対面授業のあるモデルは、5つあるモデルの1つに過ぎない(表1)が、先行研究で見られるブレンディッドラーニングは、Bersinの5つのブレンディッドラーニングモデルの「2.インストラクター主導プログラムと自己学習eラーニングのブレンド」に当たるものがほとんどであった。

同様に、Horn・Staker (2017) では、ブレンディッドラーニングを実践するにあたり、問題のない学校は破壊的イノベーションとは大きく異なる持続的イノベーションから始めることが多いとしている。つまり、現状大きな問題に直面しているわけではないが授業をより良く改善したい場合は、持続的イノベーションになることを示唆している。今回調査した論文のほとんどは、いわゆる学校教育（高等領域も含め）での実践研究だった。このことから、伝統的な対面授業の良さを残しつつITを取り入れた授業改善としてのブレンディッドラーニングの実践、Horn・Stakerのいうところの持続的イノベーションが多くなったと考えられる。

## 4. ブレンディッドラーニングの現状と今後の課題

### 4.1. ブレンディッドラーニングと反転授業

日本語教育では、2014年以降ブレンディッドラーニングの実践があまり見られず、その代わりにブレンディッドラーニングの一形態である反転授業（Horn・Staker2017）の実践研究が見られるようになって来た（古川・手塚2016、篠塚2016、藤本2016）。反転授業は、従来型の教室活動にオンライン学習を組み込んだ点が、文系の語学教師にも導入のイメージがつかみやすかったため、注目が集まったのではないかと思われる。しかし、今回の定義の調査から見ると、これまで日本で行われて来たブレンディッドラーニングもほぼ伝統的な教室活動の中で行われている。そこで、反転授業に興味を持った教師に、反転授業だけが教育にITを取り入れる有効な教育方法ではないこと、どのように授業にITをブレンドするか（取り入れるか）は、授業デザイン全体を見なければいけないことなどを、改めて知ってもらうことも必要ではないかと思う。

### 4.2. ブレンディッドラーニングにおける対面授業と今後の可能性

Horn・Staker (2017) によると、破壊的イノベーションには通信制教育も含まれ、今回調べた研究の中にも、通信教育のカテゴリーに入るとも思われるものがいくつか見られた（藤本2008、2011、竹村2014）。それらの実践研究は、Bersinの定義ではブレンディッドラーニングと定義されるが、Horn・Stakerの定義からは2つの点で外れる。1つは、正式な教育課程ではないこと、2つ目は、対面がオンラインでの授業である点である。Horn・Staker (2017) はアメリカの教育機関の事例を調査しブレンディッドラーニングのモデルを定義した。しかし現在、社会を取り巻く環境は変化しており、学びは多様化してきている。MOOC（Massive Open Online Courses）などのオンラインでの学びがその代表であり、破壊的イノベーションを推進



していると思われる教育機関ではオンラインでの対面授業が積極的に取り入れられている<sup>4,5,6)</sup>。このことから、「正規の学校教育の枠組みのみでブレンディッドラーニングを捉える」、「オンライン対面授業はその範疇に入らない」とするHorn・Staker (2017) のブレンディッドラーニングの定義は、むしろその可能性を狭めてしまうものではないだろうか。

インターネットの世界的発達により、日本語学習機会の多い国でも少ない国でも、インターネットを通じて日本語学習教材にアクセスすることが可能となってきた。学習者の環境は様々で、正規の教育機関で伝統的な教室活動を受けられないケースもあり、ブレンディッドラーニングは、そのような様々な国にいる様々な学習希望者へ学習機会を提供できる。また、オンライン学習で自律的に自学自習できる学習者ばかりではない現状を考えると、オンライン学習とバーチャルなオンライン対面授業を組み合わせたブレンディッドラーニングは、有効な手段になる可能性があり、ニーズもあるのではないだろうか。

以上から、これからのブレンディッドラーニングは持続的なイノベーションに止まらず破壊的イノベーションを意識する必要がある、従来の教室活動を念頭に置いた定義だけではなく、広義の定義も念頭に置き実践研究を行うことも必要であると思われる。

## 注

- 1) BLENDED LEARNINの和訳表記には、「ブレンディッド・ラーニング」と「ブレンディッドラーニング」などがあり、現段階でもどの表記を用いるかは、筆者の判断による。本稿では、ブレンディッドラーニングの表記を用い、書籍及び論文タイトルがブレンディッドラーニング以外の場合は、そのままの表記を用いることとする。
- 2) オンライン学習では双方向性が重要である。そのため本稿では、コンピュータおよびインターネット技術の総称として、IT = information technology (情報技術)ではなく、ICT = Information and Communication Technology (情報通信技術)を用いることとする。
- 3) Blended Learningは、しばしBLと略されることがある。
- 4) 「大学を歩くMOOCの申し子、米MITのバトウシグ」朝日新聞 2014年1月28日 <http://globe.asahi.com/feature/side/2014011600001.html> (2017年10月24日閲覧)
- 5) <http://www.futureedu.tokyo/education-news-blog/2016/7/22/minerva-schools-ben-nelson-interview> (2017年10月24日閲覧)
- 6) <http://www.itmedia.co.jp/news/articles/1710/13/news015.html> (2017年10月24日閲覧)

## 参考文献

- 浅田義和・鈴木義彦・長谷川剛・渥美一弥 (2013) 「ワールドカフェおよびmoodleを利用した医療倫理教育の実践と運用上の課題」, 『自治医科大学紀要』 36, 71-78, 自治医科大学
- 安達一寿 (2007) 「ブレンディッドラーニングでの学習活動の類型化に関する分析」, 『日本教育工学会論文誌』 31 (1), 29-40, 日本教育工学会
- 安藤淑子 (2011) 「ブラジル人学校と大学を結んだ遠隔日本語教育: 初級学習者に対するブレンディッドラーニングの試み」, 『山梨県立大学国際政策学部紀要』 6, 51-60, 山梨県立大学
- 池田伸子 (2010) 「ブレンディッドラーニング環境におけるeラーニングシステム利用の効果に関する研究: 立教大学初級日本語コースを事例として」, 『ことば・文化・コミュニケーション: 異文化コミュニケーション学部紀要』 2, 1-12, 立教大学
- 池田順子・深田淳 (2012) 「Speak Everywhereを統合したスピーキング重視のコース設計と実践」, 『日本語教育』 152 (0), 46-60, 公益社団法人日本語教育学会

- 伊藤（横山）美紀・伊藤恵・木塚あつみ（2017）「ブレンディッドラーニングによる言語調整能力の育成—日本語教師教育現場から—」, 『人文論究』(85), 21-29, 北海道教育大学函館人文学会
- 榎田一路（2013）「視覚情報を付加したオリジナル英語学習用ポッドキャストによるブレンディッド・ラーニング」, 『広島外国語教育研究』(16), 1-13, 広島大学外国語教育研究センター
- 大野直子（2015）「医学英語、医療通訳教育へのブレンディッドラーニング導入に関する一考察」, 『帝京大学高等教育開発センターフォーラム』2, 39-51, 帝京大学高等教育開発センター
- 大野直子（2017）「医療通訳のブレンディッドラーニング—国内外の実施例より—」, 『国際基督教大学学報・I-A 教育研究 = Educational Studies』59, 183-188, 国際基督教大学
- 小野寺由美子（2014）「実践力の向上を目指した医療従事者の現任研修：看護部での取り組みを中心に（特集 救急救命のための職員研修の実践）」, 『学校救急看護研究』7 (1), 2-7, 日本学校救急看護学会
- 河井正隆（2009）「専門学校教員の養成においてブレンディッド型 e-Learning を活用した協調自律学習の有効性の検討」, 『日本教育工学会論文誌』33 (Suppl.), 29-32, 日本教育工学会
- 岸本光代・通山薫（2010）「医療系大学における Moodle を利用した血液像トレーニングの実践と TV 会議システムを利用した学習フォローアップの試験的運用」, 『日本教育工学会論文誌』34 (2), 133-141, 日本教育工学会
- 北澤武・永井正洋・加藤浩・赤堀 侃司（2009）「eラーニングサイトの予習復習利用が児童の動機づけ・自己制御学習方略・成績に与える効果—小学校理科におけるブレンディッドラーニング環境を対象として—」, 『科学教育研究』Vol.33 No.1, P34-49, 科学教育研究
- 北澤武・永井正洋・上野淳（2010）「大学情報教育のブレンディッドラーニング環境における eラーニングシステムを用いたフィードバックの効果」, 『日本教育工学会論文誌』34 (1), 55-66, 日本教育工学会
- 久木章江・赤倉貴子（2009）「『構造力学』のブレンディッドラーニングに関する研究：つまづくポイントを提示する学習システムの提案」, 『日本教育工学会研究報告集』2009 (3), 165-168, 日本教育工学会  
国際交流基金・電通の共同日本語学習者調査結果（2017年9月10日閲覧）  
[https://drive.google.com/file/d/0B\\_YYwiD-\\_l6lBIRNVEIULUpwS28/view](https://drive.google.com/file/d/0B_YYwiD-_l6lBIRNVEIULUpwS28/view)
- 小林伸行・木田恵理子・板谷道信・田中伸代・Waterbury David H.（2008）「医学用語ブレンディッド・ラーニングシステムにおける学生の成績と意識の分析」, 『川崎医療福祉学会誌』17 (2), 423-430, 川崎医療福祉大学
- 三宮有里・村中陽子・熊谷たまき（2013）「看護技術学習科目におけるブレンディッド型授業の運営とその評価（医療・看護・福祉分野における ICT 利用教育および、ICT を活用した教育の質保証）」, 『教育システム情報学会研究報告』27 (7), 110-115, 教育システム情報学会
- 宍戸真（2013）「ESP に基づいた理工系学生のための英単語学習指導」, 『東京電機大学総合文化研究』(11), 51-58, 東京電機大学
- 篠崎大司（2014）「Moodle を活用した日本語教員養成向け eラーニングコンテンツの開発と授業評価：「言語と教育」から「社会・文化・地域」まで」, 『日本語教育方法研究会誌』21 (1), 日本語教育方法研究会誌
- 篠崎大司（2013）b 「日本語上級文法 eラーニングコンテンツの開発—ブレンディッドラーニングモデルの構築に向けて—」平成 24 年度漢字・日本語教育研究助成制度報告書『漢字・日本語教育研究』第 2 号
- 篠崎大司（2013）a 「日本語教員養成向け eラーニングコンテンツの開発と授業実践および授業評価：日本語教員養成向けブレンディッドラーニングモデルの構築に向けて」『別府大学紀要』, No.54, p.1-9, 別府大学
- 篠崎大司（2011）b 「学習意欲の向上を目指した先行事例の事前提示とその教育効果—ブレンディッドラーニングにおけるオフライン教育の充実に向けて—」『別府大学日本語教育研究』, pp.8-14, 別府大学日本語教育研究センター
- 篠崎大司（2011）a 「Moodle を活用したブレンディッドラーニングモデルの構築とその有効性—上級日本語文法を中心に」, 『別府大学紀要』(52), 1-10, 別府大学
- 篠崎大司（2010）「Moodle を活用した上級日本語聴解 eラーニングコンテンツの開発と学習者評価—ブレンディッドラーニングモデルの構築に向けて—」『別府大学紀要』第 51 号 pp.21-34, 別府大学

- 篠崎大司 (2009) 「Moodleを活用した上級日本語読解eラーニングコンテンツの開発と学習者評価—ブレンディッドラーニングモデルの構築に向けて—」『別府大学国語国文学』第51号 pp.1-26, 別府大学国語国文学会
- Josh Bersin, 赤堀侃司監訳 (2006) 『ブレンディッドラーニングの戦略—eラーニングを活用した人材育成』(第一刷), 東京電機大学出版局
- 鄭仁星・鈴木克明・久保田賢一 (2008) 『最適モデルによるインストラクショナルデザイン—ブレンド型eラーニングの効果的な手法』, 東京電機大学出版局
- 杉江聡子・三ツ木真実 (2015) 「遠隔交流を活用した中国語ブレンディッド・ラーニングの実践と混合研究法による評価」, 『教育システム情報学会誌』32 (2), 160-170, 教育システム情報学会
- 鈴木靖 (2017) 「学生のやる気を引き出すブレンド型学習」, 『中国言語文化学研究』6, 19-27, 2大東文化大学大学院外国語学専攻科中国言語文化学専攻
- 竹村徳倫 (2014) 「インドにおける非母語話者教師向けオンライン日本語研修—遠隔地を対象としたブレンディッドラーニング—」, 『国際交流基金日本語教育紀要』, (10), 39-54, 独立行政法人国際交流基金
- 竹村徳倫 (2013) 「moodleを活用した初中等日本語教師への初級日本語研修と課題—インドにおける教師研修でのブレンディッドラーニングの試み—」, 『国際交流基金日本語教育紀要』(9), 121-133独立行政法人国際交流基金
- 田中伸代・名木田恵理子・小林伸行・板谷道信・Waterbury David H. (2007) 「医学用語教育におけるe-learning: ブレンディッド・ラーニングの実践と評価」, 『川崎医療福祉学会誌』17 (1), 153-162, 川崎医療福祉大学
- 玉木鉄也編 (2010) 『これ一冊でわかるeラーニング専門家の基本』, 東京電機大学出版局
- 趙秀敏・今野文子・朱嘉琪・稲垣忠・大河雄一 (2012) 『第二外国語としての中国語学習のためのブレンディッドラーニングの開発と実践 (特集 実用的eラーニング環境の構築と運用)』, 教育システム情報学会誌29 (1), 49-62, 教育システム情報学会事務局
- 趙秀敏・富田昇・今野文子 (2013) a 「大学初級中国語を対象とした3段階ブレンディッドラーニングのための教科書の開発」『教育システム情報学会研究報告 (2013年度 第3回研究会 先進的な第二言語学習支援システム—一般)』28 (3), 75-80, 教育システム情報学会
- 趙秀敏・富田昇・今野文子 (2013) b 「第二外国語としての中国語ブレンディッドラーニングのためのeラーニング教材設計指針の提案」, 『教育システム情報学会研究報告 (医療・看護・福祉分野におけるICT利用教育および, ICTを活用した教育の質保証)』, 27 (7), 教育システム情報学会
- 徳本浩子 (2012) 「ブレンド型授業の実践とその実効性に関する考察」, 『名古屋外国語大学外国語学部紀要』(42), 141-156, 名古屋外国語大学
- 仲田和宏他 (2004) 「LINUX授業におけるブレンディッドラーニング・システムの開発」, 『電子情報通信学会技術研究報告』. ET, 教育工学104 (342), 21-26, 一般社団法人電子情報通信学会
- 中津川雅宣・平田祐基 (2017) 「ブレンディッド・ラーニングによる英語学習意欲について: ビデオプロジェクトを通して」, 『言語センター広報』, 33-40, 小樽商科大学言語センター
- 中溝朋子 (2010) 「留学生のための日本語初級e-learning教材の開発と課題」, 『大学教育』6, 119-126, 山口大学大学教育機構
- 名木田恵理子・小林伸行・田中伸代・板谷道信・重田崇之 (2011) 「医学用語ブレンディッドラーニングへの協調学習導入の効果と課題」, 『川崎医学会誌. 一般教養篇』37, 83-93, 川崎医科大学
- 西郡仁朗・清水政明・藤本かおる (2007) 「テレビ会議システムとmLearningの併用によるブレンド型日本語研修」, 『人文学報』(382), 1-14, 首都大学東京都市教養学部人文・社会系
- 林敏浩・林田行雄 (2003) 「ブレンディッド・ラーニングに基づく自習支援のためのe-learning教材の開発」, 『JSiSE Research Report』 vol.18, no4, 73-78, 教育システム情報学会
- 原田三千代 (2016) 「対話的推敲活動を通じた文章テキストの変化: 『日本語表現』 クラスレポートをもとに」, 『三重大学教育学部研究紀要. 自然科学・人文科学・社会科学・教育科学・教育実践』67, 411-423, 三重大学教育学部
- 藤本かおる (2011) 「遠隔教育における初級日本語教育でのweb会議システムの利用とその考察—インドと

- の遠隔対面授業と日本国内の対面授業の比較を中心に一」、『日本e-Learning学会会報誌』Vol.11, 12-17, 日本e-Learning学会
- 藤本かおる（2008）「初級日本語教育でのブレンディッドラーニングの試み：CMSと双方向テレビ会議システムを利用した東京・台北間での遠隔授業」、『本語研究』28, 31-44, 首都大学東京
- 古川智樹・手塚 まゆ子（2016）「日本語教育における反転授業実践：上級学習者対象の文法教育において」、『日本語教育』（164）, 126-141, 日本語教育学会
- 古川智樹・池田佳子（2014）「第14章 ブレンディッド・ラーニングにおける日本語教育のデザイン」、『大学生の学びを育む学習環境デザイン』, 243-256, 岩崎千晶編著, 関西大学出版部
- 宮地 功編著（2009）『eラーニングからブレンディッドラーニングへ』, 立教出版
- Muchael B.Horn・Heather Staker, 小松健二（訳）（2017）『ブレンディッド・ラーニングの衝撃』（第一刷）教育開発研究所
- メイビン ドン（2017）「短時間語学サバイバル学習：次世代型外国語学習モデル」、『湘南工科大学紀要』51（1）, 71-92, 湘南工科大学
- 茂木良治・村上公一・神尾達之（2009）「外国語教育におけるブレンディッドラーニングの実践報告」、『早稲田教育評論』23（1）, 19-32, 早稲田大学教育総合研究所
- 望月通子（2013）「ピア・ラーニングに対する学習者の認識と学びのプロセス」、『関西大学外国語学部紀要』8, 87-97, 関西大学外国語学部
- 山本勝巳・東淳一・住政二郎（2012）「ブレンド型英語学習環境の構築と実践」、『流通科学大学論集. 人間・社会・自然編』24（2）, 33-37, 流通科学大学学術研究会
- 吉川千鶴子・中嶋恵美子・須崎しのぶ・山下千波・川口賀津子（2012）「看護技術教育のブレンディッドラーニングにおけるeラーニングシステム活用に関する研究」、『日本看護研究学会雑誌』35（5）, 5\_105-5\_115, 看護研究学会
- ロッシェル・カップ（2007）「グローバルビジネスの注目キーワード」vol.36 Blended learning, 『スタッフアドバイザー』, 2007May5
- ALLUM Paul（2013）“Principles and Practices Applicable to the Design of Successful Blended Language Learning”, 『ことば・文化・コミュニケーション：異文化コミュニケーション学部紀要』5, 1-14, 立教大学異文化コミュニケーション学部
- Harvey Singh（2003）“Building effective blended learning programs”, Technology-Saddle Brook Then Englewood Cliffs NJ ,Volume 43, Number 6, Pages 51-54.
- Josh Bersin（2004）“The Blended Learning Book: Best Practices, Proven Methodologies, and Lessons Learned”, Pfeiffer
- Michael B. Horn・Heather Staker（2004）“Blended: Using Disruptive Innovation to Improve Schools”, Jossey-Bass
- LEIS Adrian（2015）“Flipped Classrooms and their Implications for English Education in Japan”, 『宮城教育大学紀要』50, 231-239, 宮城教育大学
- SAITO Akihiro（2017）“Planning online engagement in a language learning unit”, 『八戸工業大学紀要』36, 211-216, 2017-03八戸工業大学